

「HTPT collection」

「2人の幽霊」・・・2Pㄱ

「犯人は山田」・・・8Pㄱ

「オヤジラップ」・・・17Pㄱ

「キルハウス」・・・26Pㄱ

「上手にBH」・・・36Pㄱ

「HTPT collection」

幽霊
2

幽霊
1

男
3

男
2

男
1

【登場人物】

「2人の幽霊」

舞台は男1の部屋。椅子が2つある。幽霊1が下手、幽霊2が上手、男1が中央に板付き。

明転。

男1「あいつ遅いなー」

男1、上手に移動する。幽霊2、男1へアピールする。男1、下手へ移動する。幽霊1、男1へアピールする。男1、どちらにも気付かない。

チャイム音。

男1「お、来たな。開いてるよー」

男2が下手から入ってくる。

男2「ういっす。(幽霊の方をチラチラ見ながら) うわうわわ…。やっぱりそうだと思う
ったんだよー…」

男1「え？何が？」

男2「何が？じゃねえよー。一応聞くけど、お前は今、恋人とか家族と一緒に暮らして
いますか？」

男1「ううん(首を横に振る)。俺は1人暮らしだって言ってるじゃん」

男2「もう確定じゃーん。(幽霊1を見ながら) すごいこっち見てるじゃーん」

男1「ごめん」

男2「いやお前に言ってるじゃねーよ。幽霊だよ」

男1「幽霊？」

男2「いるんだよこの部屋に。俺は昔っから霊感が強いからそういうのすごい視えるんだ
よ」

男1「えー？嘘だー？」

男2「嘘じゃねえよ！つうかこの部屋に入る前から感じてたの。そんで入ってみたら案の
定だよ。恐いわー。ほんっと苦手」

幽霊1が男2に近づく。

男2「うわうわうわ！こっちきた！こっちきた！無理無理無理！」

幽霊1が離れ、幽霊2が近づく。しかし男2はノーリアクション。

男1 「えーでも、昔から視えてるんだったらそういうの慣れてるんじゃないの？」
男2 「でたそういう意見。慣れる慣れないとかじゃないから。苦手なものは苦手なんだよ」

幽霊2が離れ、幽霊1が男2に近づく。

男2 「もういいっていいって！じっとしててくれよー！」

幽霊1が離れ、幽霊2が近づく。しかし男2はノーリアクション。

男1 「でもビビりすぎじゃない？」

男2 「視えないからってさあ。ホント少しでも近くに來られただけでも無理だから」

幽霊2が離れ、幽霊1が男2に近づく。

男2 「来るなってもーう！積極的にビビらせに來てるよこの幽霊ー！」

幽霊1が離れ、幽霊2が近づき存在をかなりアピールする。しかし男2はノーリアクション。

男1 「積極的にビビらせにくるとかはお前少し盛ってんだろ？」

男2 「ホントだよ！今は大人しいけど、どうせまたすぐ近づいてくるよー！」

幽霊2 「…なんで俺のこと視えねえんだよ！靈感強いでしょお前！片方だけ視えるとかあるのそんなこと…：視えてビビれよー！」

幽霊1が男2に近づく。男2、逃げて幽霊2の隣に立つ。

男2 「もうね、隣とかにこられたら絶対泡吹いて倒れちゃうよ俺」

幽霊2 「俺の隣にはいるけどね！」

男1 「どの辺にいるの？この辺？（手を振って触ろうとする）」

男2 「やめろやめろ！（幽霊1に）触っちゃう！触っちゃう！」

幽霊2 「（男1の手に当たる）触ってる！触ってる！俺には触ってる！」

男2 「（男1を止める）あぶねーな！もう少しでホントに触っちゃうところだったぞ！」

男1 「すまんすまん」

男2 「あのさあ、ちょっと先生に電話して良い？」

男1 「先生？」

男2 「靈的なことでお世話になってる人がいてさ、今から呼ぶよ。除靈してもらった方が

良いって」

男2、部屋の隅で電話をかける（声は出さずにジェスチャーで）。

幽霊2 「（幽霊1に）なんだよあいつな。俺だけ視えないとかあんのかよ。いいよなあんたは。けっこうノリノリでビビらせてたじゃん」

幽霊2、反応無し。

幽霊2 「さてはお前も視えない俺のこと？嘘でしょ？そういうことこそあるの？霊感のない幽霊ってどういうことだよ！」

男2、電話終わる。

男2 「先生、ちようどこの辺にいるみたいだからすぐ来てくれるって」

男1 「おお、ありがとう」

幽霊2 「もーぶざけんなよ！（椅子を蹴る）」

男1・男2・幽霊1 「！」

男2 「今…椅子、動いたよな？」

男1 「おお、それは俺も分かった。もしかして、今のその幽霊がやったの？」

幽霊1、手を横に振って必死に違うアピール。

男2 「違うって言ってるぞ」

男1 「でもそんなことできるの幽霊しかいないでしょ」

間

幽霊2、椅子2つを持って動き回る。男2と幽霊1、ビビる。

男1 「すげーことになってんなー」

男2 「おいやっばりお前（幽霊1）だろ！早く止めてくれ！」

幽霊1、ビビりながら手を横に振って必死に違うアピール。

幽霊1 「いやー！！（頭を抱える）」

幽霊2 「なんで幽霊のお前が一番ビビってんだよ！」

チャイム音。

男2 「先生だ！」

男1 「開いてますー」

男3、下手から部屋に入ってくる。

男3 「失礼します。なるほど、確かに強い霊気を感じますね。しかも一つじゃない」
他4人 「え？」

男2 「どういうことですか先生？」

男3 「分かりませんか？幽霊は、2人います」

男1・男2 「えー？」

男3 「それはあなた（幽霊1）と……そして、あなた（男1）です」

幽霊2 「は？」

男1 「え？俺が、幽霊？」

男2 「先生！変な冗談はやめてください！俺はこいつと外で何回も会っているんです
よ！幽霊の訳ないじゃないですか！」

幽霊2 「そうだそうだ！」

男3 「その時、あなた（男2）以外にもご友人はいましたか？この方（男1）があなた（男2）
以外とお話しているところを見たことはありませんか？」

幽霊2 「どうなんだよ？」

男2 「無い……」

幽霊2 「嘘だろ……！」

男1 「俺は、本当に幽霊なんですか？何も思い出せない……」

男3 「大丈夫です。私の手を握ってください」

男1、男3の手を握る。『パーー！』という効果音。

男1 「あ……思い出した。俺は、あの時事故で……。 （幽霊1に気付く）夕子！」

幽霊1 「ようやく……私のことが視えてくれたのね、あなた」

幽霊2 「……奥さんだったの？」

男1 「すまん。ずっと、近くにいたのに気付いてやれなくて」

幽霊1 「（首を横に振る）さあ、行きましよう、あなた」

男1 「ああ。……（男2に）少しの間だったけど、俺と仲良くしてくれてありがとな。でも

悪かったな、俺が幽霊で。苦手なのに」

男2 「…お前みたいな幽霊がいるって分かったんだ。苦手意識だって、薄くなったよ」

男1 「それはよかった」

男1、男2に近づくがそれを露骨に避ける男2。

男1・男2 「…ういく！（指を向ける）」

幽霊2 「そんな簡単にはね、克服できないよね」

男1 「じゃあ俺はもう行くよ」

『パー！』という効果音と共に男1と幽霊1が成仏する（はける）。幽霊2もそれに便乗しようとするが成仏できない（はけられない）。

男3 「さあ、私達も行きましょう」

男2 「はい」

男2と男3、はける。

間

幽霊2 「いや、俺は……」

暗転。

（終）

「HTPT collection」

「犯人は山田」

【登場人物】

刑事

部下

探偵

オナー

作家

霊媒師

被害者

舞台はとあるペンション。舞台には刑事とその部下、そして倒れている被害者。明転。

刑事 「それで、被害者については？」

部下 「はい。被害者は犯人に後ろから鈍器で殴られ死亡、とみて良いでしょう。また被害者は色々な人から恨みを買っていたようです」

刑事 「なるほど、それだと動機から犯人を探るのは難しいな…。他に何か気になったことはあるか？」

部下 「はい。被害者はダイイングメッセージを残しております」

刑事 「メッセージ？」

部下 「見たところ、自分の血を使っているでしょう。このようなメッセージを。(犯人は山田)と書かれた紙を見せる」

刑事 「犯人は山田、か。これはだいぶ重要な手掛かりとなるな。それじゃあ早速、このペンションにいる人達を呼んできてくれ、えっと、すまん、お前新人だったよな？名前、なんだったっけ？」

部下 「はい！わたくし、山田武と申します！」

刑事 「え？」

部下 「山田武です！」

刑事 「…昨日は？」

部下 「はい？たまたまこのペンションに泊まっておりました！」

刑事 「…君の名前は？」

部下 「山田です！」

刑事 「それは自白と取って良いのかな？」

部下 「どういうことですか！(刑事を叩く)」

刑事 「痛い！いやだって犯人は山田、なんでしょ？」

間

部下 「ああ！」

刑事 「ああ！じゃないよ」

部下 「私を疑っている？違いますよ！びっくりしたー。私はただ、ここのペンションに泊まって被害者の方と一緒に賭け麻雀をし深夜一番に被害者を発見した、職業柄犯行の手口とかに詳しいただの山田ですよ！」

刑事 「けっこう怪しいな！君が一番怪しいってなってるよ、私の中で」

部下 「そんなー！(刑事を叩く)」

刑事 「痛い！そういうとこだよ？」

オーナーが入ってくる。

オーナー「どうも刑事さん。捜査はどうですか？」

刑事「ちよūd怪しい者を見つけたところですよ。ええつとあなたは確か、このオーナーの、」

オーナー「はいペンションドカベンのオーナー、山田と申します」

刑事「は？」

オーナー「ああ、ドカベンというペンション名は珍しいですね」

刑事「そっちもですけど、え？山田さん？」

オーナー「はい、山田です。何か？」

部下「犯人だな、お前！」

刑事「やめろお前！」

オーナー「犯人？」

刑事「いやこつちの話なんですけどね」

作家が入ってくる。

作家「ちよつと刑事さん、私はまだ帰ることができませんの？」

刑事「ああ、すみません。捜査が終わるまでは」

作家「明日までに原稿を出版社まで持って行かないといけないのだけれど？」

刑事「明日までには必ず。作家さんでございませうか？」

作家「ええ」

部下「そんなことより、あなたの名前は？」

刑事「おい」

作家「名前？わたくし、西園寺礼子と申します」

部下「山田じゃねえのかよ！（刑事を叩く）」

刑事「痛い！」

作家「ええ？」

刑事「やめなさい。すみません、こいつ新人なもんで、」

作家「どうしてわたくしの本名を知っていますの？」

刑事・部下「はい？」

作家「西園寺礼子はわたくしのペンネーム。本名は山田うめと申します」

刑事「山田さんでしたか…」

霊媒師が入ってくる。

霊媒師 「犯人は見つかりましたか？」

間

部下 「あなた名前は？」

霊媒師 「はい？」

刑事 「…お名前は？」

霊媒師 「名前？太郎ですが」

部下 「山田じゃねーか！」

刑事 「違う違う。まだ山田かどうかは分からないから、太郎だけじゃ。確かに俺も一瞬
そう思ったけど」

霊媒師 「私の苗字は山田ではありませんよ」

刑事 「ほらあ。すみません、こいつ馬鹿なもんで。それでお名前、苗字は？」

霊媒師 「小山田です」

刑事・部下 「山田じゃねーか！」

霊媒師 「はあ？一体どういうことなのですか？」

作家 「そうですね。さつきからお話が見えないのですが」

オーナー 「説明して頂けませんか？」

刑事 「…実はですね、この被害者の方ダイイングメッセージを残しております。（部
下が紙を見せる）この通り『犯人は山田』と書いてあるんです。そしてあなた方
は全員山田だ」

『ダーン！』という音と一緒にリアクションする、オーナー・作家・霊媒師。そ
の後『ダーン！』という音と一緒にリアクションする部下。

刑事 「お前は知ってるだろ！」

部下 「つまり、あなた達の誰かが犯人。そういうことだ！」

刑事 「いやお前もまだ容疑者だからね」

大げさにリアクションする部下。

刑事 「それはもういいよ！…この4人の中に犯人がいる、ということですよ」

探偵 「はたしてそうでしょうか？」

刑事 「誰だ？」

カッコいい BGM・照明と共に探偵が登場する。

探偵「私はこのペンションにたまたま宿泊しておりましたが探偵です。すみません、お話は聞かせて頂きました」

刑事「なんだ君は？捜査に口を出すつもりか？」

探偵「刑事さん、この中でまだ名乗っていない人がいらっしやいますよね？」

刑事「何？」

探偵「刑事さん…あなたのお名前も、教えて頂けますか？」

刑事「福山だ。お前は？」

探偵「山田真一です」

刑事「お前も山田じゃねーか！ただ容疑者が1人増えただけじゃないか」

探偵「まずは状況整理からしましょうか」

刑事「勝手に仕切るな」

探偵「私も朝から独自に聞き込みをしておりますね。まず初めに被害者の死体を見つけたのは山田さん（部下）」

部下「はい」

探偵「そして山田さん（部下）はそのことを山田さん（オーナー）に伝えるため呼びに行こうとしたが、たまたま近くにいた山田さん（作家）にそのことが伝えられた」

作家「はい」

探偵「その後山田さん（オーナー）も到着し、山田さん（部下）が山田さん（作家）と

一緒に山田さん（オーナー）へ状況を説明。しかしその時山田（探偵）、私が、

刑事「ちよちよ、ちよつとちよつと。すごいややこしいんだよ！みんな山田だから！」

作家「刑事さん、あなたは福山ですよ？」

刑事「俺のことは良いんだよ」

霊媒師「刑事さん、私は小山田ですよ？」

刑事「ほとんど山田みたいなものだよ！」

オーナー「刑事さん、私は山田です」

刑事「知ってるよ！なんで今言った？」

部下「そうカツカしないでください」

探偵「では、どのようにお呼びすれば？」

刑事「じゃあ…下の名前で呼び合しましょう」

探偵「友達でもないのに？（急にもじもじする）」

オーナー・作家・霊媒師・部下ももじもじする。

刑事「急にもじもじしました。…え？全員？」

探偵 「それはちょっと…抵抗あるかなー」

刑事 「めんどくさいなこいつら。だったら職業呼びで良いよもう。それで状況整理、」

探偵 「(被害者をじっと見る) むむー!」

刑事 「今度はなんだ?」

探偵、被害者に近づき匂いを嗅ぐ。

部下 「ちよっと!勝手に被害者に触らないで、」

探偵 「鑑識の結果は?」

刑事 「今待っているところだ」

探偵 「それでは、鑑識から連絡がくる前に事件が解決してしまうかもしれませんねえ」

刑事 「何?」

探偵 「このダイイングメッセージ、一見すると血だけで書かれていますようですが、実はこれ、インクも混ざっています。赤のね」

刑事 「なぜ分かる?」

探偵 「私、人の血の匂いははっきりと分かるのです。別のものが混ざっていることから簡単に分かります」

部下 「中々キモイ特技ですね」

探偵 「犯人は被害者と争っている時、勢い余って自分の持っていた赤のインクをこぼしてしまった」

刑事 「被害者本人のかもしれないだろう?」

探偵 「そっか…」

刑事 「え?揺らいじやうの?」

部下 「しかし待ってください。はじめの調べで被害者は財布と携帯電話しか持っていないかったと聞いております」

探偵 「つまり、現在自分で所持しているもしくは部屋の中にインクがある人物こそが…」

犯人だ!

刑事 「スツと続けたね」

探偵 「隠しても調べればすぐに分かることです。さあ、赤のインクを持っている者、正直に手を挙げる!」

オーナー、作家、霊媒師、手を挙げ、懐から赤のインクを出す。

刑事 「けっこういるじゃねーか!」

探偵 「…実は私も持っているんです。(懐から赤のインクを出す)」

刑事 「お前もかい!じゃあ何のために話してたんだよ!」

探偵「いや私も喋ってる途中から、あれ？これ自分もインク持ってるな〜って気付いたんですけどね。もう引き返せなかったんで」

探偵→の台詞と同時に他の3人も各々自分は犯人ではないと主張する。刑事、困惑している。

部下「先輩：自分インク持ってませんよ」

刑事「うるさいなお前！とりあえず皆さん、落ち着いてください！この推理はあてにならないので！だからお前も（部下）疑いは晴れてないよ」

部下「そんない！」

探偵「迷宮入りだー！」

オナー・作家・霊媒師「迷宮入りなのかー！」

刑事「なんだお前ら…。そしてお前（探偵）は何しに出てきたんだ」

探偵「くそー。被害者本人から犯人が聞けたらー」

刑事「探偵とは思えないセリフだな」

霊媒師「え？聞きたいのですか？」

刑事「…うん？」

霊媒師「では、聞きます？」

刑事「…なんだ急にお前？」

霊媒師「いや私だけ職業を言いそびれていたのですが、霊媒師なんです。この前も夫婦の霊を成仏させていただきました」

刑事・部下・探偵「霊媒師？」

霊媒師「はい。被害者の方、まだ亡くなって1日経っていませんよ？それでしたら、憑依できます」

刑事「…しかしそういう霊的なことは現代の法律では証拠として、」

部下「手掛かりもないですしやってみましょうよ」

探偵「ぜひお願いします」

霊媒師「わかりました。では誰に憑依させましょう？」

探偵「え？」

部下「あなたに憑依させるのではなく？」

霊媒師「ヤダヤダヤダ。だって憑依されるのってすごい気持ち悪いんですよ？憑依が終わったあとなんだろう…酔みたい匂いが鼻の奥からするんですよ」

部下「そんなこと言ったら誰も憑依されたくないですよ？」

霊媒師「ではやめますか？」

部下、探偵見つめ合う。

部下 「…先輩」

刑事 「俺？嘘でしょ？お前（部下） かお前（探偵） だろ？」

探偵 「刑事さん」

刑事 「いやいや絶対いやだよ」

オーナー 「刑事さん」

刑事 「オーナー？」

作家 「刑事さん」

刑事 「うめさん？」

霊媒師 「では刑事さんに。ごによごによ…（何か呪文のようなものを唱え始める）」

刑事 「まだ了承してない、もうなんか始めちゃってるし！」

部下 「必ず自分たちが犯人を聞き出しますので（おもむろに刑事を羽交い絞めにする）」

刑事 「お前らあとで覚えてろよ！」

霊媒師 「はー！」

刑事 「ああああ!!！（倒れる）」

部下 「…大丈夫なんですか？」

霊媒師 「憑依は成功しました。ただ憑依できる時間は短いので話はまきでお願いします」

刑事、起き上がる。

探偵 「あなたは…被害者の方ですか？」

刑事 「（頷く）」

探偵 「…それでは、あなたをやった犯人を教えてくださいませんか？」

刑事 「犯人は…山田だ」

探偵 「うん…そう、ね。あの、どの山田さんでしょうか？」

刑事 「…（部下に指を向ける）」

探偵 「あなたが、」

刑事 「この人ではない」

探偵 「ではない、はい。…あのそういうのやめてもらえますか？」

刑事 「正直…分からない」

探偵 「は？」

刑事 「後ろから殴られたから」

探偵 「…じゃあなんでダイイングメッセージを？」

刑事 「いやこのペンション山田がたくさんいたから」

探偵 「…あの、それでは、」

『。パー！』という効果音と共に被害者の霊が成仏する。

探偵 「あ、これ成仏してる感じだ？憑依の時間終わりかな？（霊媒師頷く）」

刑事が倒れる。

間

刑事が起き上がる。

刑事 「くそう…本当に酔の匂いがスゴイ…。で、犯人、誰だった？（期待の目で）」

部下 「…山田でした」

刑事 「え？」

探偵 「…山田でした」

刑事 「え？」

オーナー・作家・霊媒師 「山田でした！」

刑事 「え？」

徐々に暗転していく。電話音。部下が電話に出る。

部下 「はい、山田です。ああ、鑑識の方ですか。…え、分かりました、ご苦勞様です」

刑事 「どうした？」

部下 「犯行現場に髪の毛が落ちていまして、そこからDNA鑑定をし、犯人が特定できたとのことです！」

刑事 「何？犯人は誰だったんだ？」

暗転。

部下 「犯人は、山田です」

刑事 「うん、もう指差してくれ」

部下 「こいつだー！」

刑事 「お前だったのかー！」

(終)

「オヤジラップ」

【登場人物】

オヤジ①

オヤジ②

チンピラ①

チンピラ②

レフェリー

妻

娘

後輩

オヤジ①（声）『この世界は理不尽だ。目立たず存在感を消すことが、一番賢い生き方なのだ』

明転。

舞台中央にオヤジ①。

オヤジ①「私の名前は仲谷健一。しがないサラリーマンです」

妻が入ってくる。

妻「ちよつとあなた、休みだからって1日中家にいないですよ」

オヤジ①「妻です。それじゃあたまにはどこか出かけようか？」

妻「うん、出かけて、1人で」

オヤジ①「1人？やめてよー1人だとその辺のカラスにもビビっちゃうんだよー』ひー鳥だー』って」

妻「…なるべく遠くまで出かけてね」

オヤジ①「昔は妻の方がべったりだったんですが」

娘が入ってくる。妻、はける。

娘「ねえ。パパー」

オヤジ①「娘です。どうした？」

娘「あのねー今度旅行行くんだけどーパパにお土産買ってきたくてーでもお金なくてーちよつと貸してほしいなーって」

オヤジ①「すまない、母さんからの小遣いがあると800円しかなくそれで良いなら、」

娘「んだよ！使えねえなー！ハゲオヤジがよー！あーキモイキモイ…」

オヤジ①「お金の話になった途端、『おっかね〜』ってね」

娘「…寒いのは頭だけにしてよ」

娘、はける。

オヤジ①「娘との半年ぶりの会話です。しかし、これで良いのです。存在感を消して、小さくなっていればもめることもないのです。しかし会社での私は違います」

後輩が入ってくる。

後輩 「ああ、仲谷さんこんなところにいらしたんですか。探しましたよ」

オヤジ① 「後輩です。会社では頼りにされているようです」

後輩 「大事なお客様がいらしたので、コーヒーを入れて持ってきてください。そのあとには…定時には少し早いです、帰って良いですよ」

オヤジ① 『定時』より早く帰るともつと働けてカミさんに怒られるんだよ。あ、ゴ

メンね、『低次元』な家庭事情で」

後輩 「…はい！」

後輩、はける。

オヤジ① 「良い返事を頂けました。これで良いのです。会社で目立っても損をするだけです。…帰宅しましょう」

チンピラ①が現れ、露骨にオヤジ①に当たってくる。

チンピラ① 「つてえなあ！どこに目付けてんだよ？」

オヤジ① 「すみませんでした」

チンピラ① 「ごめん、済んだらサツはいらねえんだよ」

オヤジ① 「どうすればよろしいのでしょうか？」

チンピラ① 「金だよ金。治療費…2万、いや3万円、払ってもらわ」

オヤジ① 「はい…（財布からお金を出す）」

チンピラ① 「800円しかねえじゃねーか！（オヤジ①を殴る）ふざけやがって。次はねえからな！」

チンピラ①、はける。

オヤジ① 「この世界は理不尽だ。だから目立たず生きていくこと、こういう時は、黙って従うのが一番賢い選択なのです。そう、逆らわず、存在感を消して。まるでこの世界に存在しないように…生きるのだ」

弱明。

オヤジ① 下手からはける。下手からチンピラ①とオヤジ②が出てくる。
明転。

オヤジ①が上手から出てくる。

チンピラ①「おい、てめえ。どこに目付けてんだよ？」

オヤジ②「……」

オヤジ①「あれは昨日の…。今度は別の人を」

チンピラ①「黙ってないで何とか言ったらどうなんだよ？」

オヤジ①「可哀想に…。私と同じような年齢、同じようなたたずまい、同じような禿げ上がり…きつとあの人も私と同じような境遇なのだろう…」

チンピラ①「シカトこいてんじゃねえぞコラ！」

オヤジ①「あの人も存在感を消しているのか？しかしこれは良くない。早く謝ってしまえば良いのに」

チンピラ①「てめえいい加減なんか喋れや！」

オヤジ②「……（ぼそぼそ小さい声で何か言う）」

チンピラ①「ああん？何だよ聞こえねえよ」

オヤジ②「…お前の体系デブでノッポ／食ってるお菓子は多分トッポ」

チンピラ①「なんつったてめえ？今俺のこと馬鹿にしただろ？」

オヤジ②「…お前は単なるチンピラ／料理して食ってやるぜきんぴら」

チンピラ①「やっぱり馬鹿にしてるよな俺のこと？なあ、おい」

オヤジ②「…まずは自分を信じな／実際お前の方がピンチだ」

チンピラ①「そのダジャレみたいなのやめろお前！」

オヤジ①「駄目だあのおっさん。いくらダジャレを言ったって、場の空気が良くなることなんてないんだ。それどころか、」

チンピラ①「ブツブツ。もうキレたぞ俺も。ボコツちまうよ」

オヤジ①「ほら。空気は悪くなるだけだ」

チンピラ①、オヤジ②を殴る。

オヤジ②「…俺は今殴られた顔面／でもあんま痛くないな残念」

チンピラ①「てめえ全然懲りねえなあ！」

オヤジ①「早く謝ってしまえ…！存在を主張したって、何も良いことなんてない、こんな世界…！」

チンピラ②、下手から出てくる。

チンピラ②「あれ？先輩何してるんすか？」

チンピラ①「おお、オメエか。ちょっとぶざけたオヤジに社会の厳しさってのを教えてやってんだよ」

オヤジ①「グズグズしているから…！増えてしまったじゃないか…！」

チンピラ②「流石先輩、やっさしー。おいおっさん、先輩の優しさになんか感謝の言葉とかねえのかよ？」

オヤジ②「…別にないぜ感謝の言葉／俺はうざってえあんたの事が」

チンピラ②「ああ？」

チンピラ①「さつきからずっとこんなこと言ってるんだこのおっさん。やっぱりもつと焼き入れねえとわかんねえ、」

チンピラ②、チンピラ①を制する。

チンピラ②「先輩ここは俺が」

オヤジ①「これ以上見ているでも、気分が悪くなるだけだ。立ち去ろう」

チンピラ②「ざけんなよおっさん…！そんなチンケでソウルの籠ってない韻の踏み方で俺達にラップバトルで勝てると思ってるのか、ああん」

チンピラ①「どうしたお前？」

チンピラ②「ああ大丈夫です。先輩の言いたいことは全部伝わってます、ここに。（胸を親指で指す）」

チンピラ①「全然伝わってないと思う多分」

チンピラ②「おいおっさん。あんたのクソみたいなラップ聞かされた先輩の頭はもうカンカン／散々な目に遭わす準備万端」

チンピラ①「どうしたお前？」

チンピラ②「すみません先輩、先陣切っちゃって。でも許せなかったんすよ。あんなラップで売ってきた喧嘩／そんなスキルじゃ通用せんから／殴られてえならぶちよ

へんざ／メーン？」

オヤジ②「…喧嘩するかここは戦場だ／ここで成果あげて獲るぜ天下」

チンピラ①「向こうもノツてきちやってんじゃん！」

オヤジ①「どういうことだ…？立ち去ろうとした私の動きは止まっていた」

チンピラ②「いよう！やるかハゲオヤジ／貶し合いだ毛無し！／怪我なしで済まさないぜ／俺マジで負けなし！」

オヤジ②「てめえの冴えない／ラップには覚悟さえない／それじゃあ勝てない」

チンピラ②「いいぜ！それじゃあ始めようぜ！ラップバトル！」

レフェリーがスツと出てくる。

レフェリー「合意とみて、よろしいですね？それではマイクシャウトを」

チンピラ②「YO！YO！今からこのオヤジ俺のスキルで必ずキルするぜよろしく！」

歓声

オヤジ② 「…この時を待ってた」

歓声

レフェリー、チンピラ①にマイクを渡す。

チンピラ① 「いややらねえよ！っていうかお前誰だよ…この公園にこんな人いた」

歓声

チンピラ① 「いやこれそういうやつじゃねえから！」

チンピラ② 「流石先輩、客とレフェリーデイスとかイカレてんな、最高っす！ふうく！さあ、もう始まりますよ」

オヤジ②とチンピラ②、構える。

オヤジ① 「なんだ…何が始まると言うのだ…気付くと私はその場から一步も動けずにいた！」

レフェリー 「先攻オヤジ、後攻チンピラ…ラップバトル、ファイ！」

BGM が流れる。オヤジ②VS チンピラ①、チンピラ②のラップバトルが始まる。初めは戸惑うチンピラ①であったがだんだんノッてくる。

オヤジ② 「まずは行くぜ俺が先攻／この勢いは止められんぞ／お前らチンピラ俺は会社員／俺を照らしてくれよサンシャイン」

チンピラ① 「今は夜だから太陽は照らない／影に迷い込んだハゲ打つ手はない／助けは来ない俺がボコボコにする／ほどほどに許す気は微塵もないぜ」

オヤジ① 「ただの言葉と言葉の掛け合いなのに！なぜか私の心を惹きつける！あれはダジャレなのか？私の好きなダジャレなのか？いや、ダジャレとも違う！しかし！私にもできるのだろうか？」※オヤジ①のセリフ中、チンピラ②はラップをしてるマイム

オヤジ② 「光が無くてもハゲを照らす／若者は出とけよテラスハウス／一つ言っとくぞこのボケナス／社会の厳しさでもてなす」

チンピラ① 「社会の厳しさよりもお前の／みすばらしさその辺りを気にしな／俺らの世界舐めんじゃねえぞ／切ったメンチは仮面じゃねえぞ」

オヤジ① 「やめろ！変な期待はするな！私はこの世界に存在してはいけないのだ！やめろ！あのやり取りは一体何なのだよやめろ！どうすれば私にもできる！やめてくれ！これ以上私の心を揺さぶるのはやめてくれ！」※オヤジ①のセリフ中、チンピラ②はラップをしているマイム

チンピラ② 「へっ！こんなもんかおっさん！」

オヤジ① 「もうやめろー！」

BGMが止まる。

オヤジ① 「やめないか。…キミたち、2体1で卑怯だとは思わないのか？」

チンピラ② 「ああ？」

オヤジ① 「私がこの方（オヤジ②）と同じチームになる」

チンピラ① 「てめえは昨日の800円だな？」

オヤジ① 「違う！私はもう昨日の私ではない！今の私は、この世界に！存在している！

（ダジャレっぽく韻を踏み、チンピラ①にどんどん近づく）」

レフェリー「オヤジ①を止める）ブレイク、ブレイク。そういうのじゃない」

オヤジ① 「（正面を向いて）間違ったか…！」

オヤジ② 「…お前は今は一文無し／でもその勇気右に出るもの無し…よろしくマイメン」

オヤジ① 「深く頷き）マイメン…！」

チンピラ① 「ハゲオヤジが1人増えたところで何も変わりなしねーよー！」

レフェリー「合意とみて、よろしいですね？先攻チンピラチーム、後攻オヤジチームで、ラ

ップバトル続行！」

BGMが流れる。オヤジ①、オヤジ②VSチンピラ①、チンピラ②のラップバトルが始まる。

チンピラ① 「2人に増えた所で同じ／逃げときゃ良かったものを手を貸し／お前ら仲良く犬死に／明け方通行人は見る死人」

オヤジ② 「犬死にしない見くびりすぎだ／無事に会社に再び行け／戦力DPさハゲかけるハゲ／2人そろったら負けるわけがねえ」

チンピラ② 「戦力DPはしてねえ戦力DOWN／お前らそれで全力か？／会社に行ってもされるリストラ／俺ら主役お前らエキストラ」

オヤジ① 「確かに私はエキストラ／オーケストラならチェリストだ／でも今ここでは指揮者になるさ／こんなダジャレも生き甲斐なのさ」

チンピラ① 「知らねえよそんなクソみたいな生き甲斐／なんか昨日が嘘みたいに粹がるな
／俺がイリーガルな言葉で切り裂くぜ／塵になるお前ここで死に晒す」

オヤジ② 「イリーガルじゃない俺はリーガル／だって会社に行くサラリーマン／意地が
ある中間管理職／かつあげの日々がなんになる」

チンピラ② 「かつあげすれば金になる／働かないから派手にやる／会社に家族つまらない
日常／俺は自由好き勝手に生きよう」

オヤジ① 「つまらない日常冷めた家庭事情／襲う慢性疲労されど発展しよう／私のダジ
ヤレは形もなさげ／でも君たちより前進する明日へ!!」

BGM 止まる。

レフェリー 「それでは判定に移ります。チンピラチームが勝ったと思うやつ!」

歓声 (普通)

レフェリー 「オヤジチームが勝ったと思うやつ!」

歓声 (大きい)

レフェリー 「オヤジチームの勝利!」

レフェリー、はける。

チンピラ① 「くそ!…まだだ、」

チンピラ② 「先輩!俺達の…負けです」

チンピラ① 「っち!」

チンピラ①、オヤジ達の前に立つ。

オヤジ① 「な、なんだ?」

チンピラ① 「…また、相手させろや」

オヤジ② 「(頷く)」

チンピラ① 「それと…これ (財布からお金を出し、オヤジ①に渡す)」

オヤジ① 「これは?」

チンピラ① 「昨日の金だよ」

オヤジ① 「千円?多いですけど…?」

チンピラ②「可哀想だったからな…」

チンピラ①とチンピラ②、上手へはける。

オヤジ②「ありがとうマイメン」

オヤジ①「…マイメンさん？」

オヤジ②「あ、斉藤です」

オヤジ①「あ、斉藤さんですか…仲谷と申します。…お礼を言うのはこっちの方です。久しぶりにこの世界に生きていることを…実感できました」

オヤジ②「…おい俺達の戦いはこれから／まだまだ足りねえぜ取れ高／玉と覚悟はしこたま入れたか？イエー」

オヤジ①「…今から、私とラップ？を？…望むところですよ！」

レフェリー、出てくる。

レフェリー「合意とみてよろしいですね？」

オヤジ①とオヤジ②のラップバトル（マイム）が始まる。

オヤジ①（声）『この世界は理不尽だ。目立たず存在感を消すことが、一番賢い生き方なのだ。しかし、たまには目立ってみるのも悪くない。賢いままでは得られない幸せは…きつとたくさんあるのだから』

暗転。

(終)

「HTPT collection」

犬 爺 妹 兄 母 父

【登場人物】

「キルハウス」

舞台はある家庭のリビング。妹、父、母、爺、犬が板付き。父、新聞を読んでいる。爺の手にはキャノン砲が付いている。
明転。

父「ええ？あの有名な小説家、西園寺礼子が逮捕されたってさ母さん」

母「あらそうなの？」

父「本名、山田うめだって」

兄が下手から入ってくる。

兄「飯はー？」

母「ごめんね、あと少しだから」

兄「んだよーおせーな」

父「順平、なんだその言い方は」

兄「ああ？」

父「もう何年も働いていないお前が、母さんに偉そうに文句を言うんじゃない」

兄「んだと？」

母「まあまあお父さんも、良いから。順ちゃんも怒らないで、ね」

爺「そうじゃよ。親子で喧嘩などするものではない」

犬「クーン…」

爺「ほれ、フミヤも悲しそうじゃ」

父「お義父さん、たまには順平にきちんと言わないと、いつまでもプー太郎しているだけなんですよ。まゆもそう思うだろ？」

妹「ええ？別にキモイクソ兄貴のことなんてどうでもいいし」

兄「なんだとこの野郎？」

妹「ああ、ああ、キモイから話しかけないで見ないで同じ空間にいないで遠くに行って北海道まで行ってそこで熊に喰われて排泄物になってそのまま大地の肥料になって」

母「はいはい、まゆもそういうこと言わない。せっかく久しぶりに家族全員揃ってるんだから、仲良く過ごしましょうよ」

兄「ふん、馬鹿じゃねーの？いいからさっさと飯作れよ」

父「順平！」

母「お父さん」

母にスポットライト。

母「順ちゃん…小さい頃はあんなに優しくして頑張り屋さんだったのに…でもねお母さん、

きつとまた働いて立派な大人になってくれるって信じているの。ううん、信じていたの。そう、昨日まで。昨日であなたはちょうどニートになって5年。もうねお母さん、信じるの疲れちゃった。本当にあなたはただのごく潰しに成り下がった…！順ちゃん、いえクソニート、いえグソクムシ…もうお前にこの家で生きる資格はないわ。そう、お母さんは…今日ここでお前を…殺す！（毒霧吹きを取り出す）」

明転。

母、目を見開いて兄を見ている。

父「母さん？…こわ！どうしたんだ？」

母「あらやだ私ったら。何でもないの。殺意、殺意」

父「は？よく分からんが、順平がちゃんとしなから母さんも怒っているんじゃないのか？」

兄「さつきからうるせえな。いい加減にしないと親父のあれ、」

父「うおっほん。まあちよつと言い過ぎたかもしれんが」

父にスポットライト。

父「順平、いや順平様。どうか俺のあの秘密、女装コレクションのことは誰にも、特に母さんにはばらさないでください…。くそう！うかつにも写真撮影中に順平に見つかってしまったからな…！今もまゆのブラを付けていることを、この場で順平にばらされると思うと…くそう！興奮する！違う違う…！もうこんな息子に怯えて過ごすのはごめんだ！こうなったら今日！口封じのために順平を…殺す！（手榴弾を取り出す）」

明転。

父、ハアハア言いながら兄を見ている。

妹「お父さん？…こわ！なんでそんなハアハア言いながらクソ兄貴見てんの？」

父「興奮なんてしてない！そんなことより、順平も順平だが、まゆももう少しくらい順平と仲良くしたらどうだ？…もう今日しかないんだから」

妹「は？…よく分からないけど、今更誰がこんなクソ兄貴と仲良く、」

妹にスポットライト。

妹「したい！仲良くしたい！恥ずかしくて全然素直になれないけど！昔みたいにお兄ち

やんって呼びたい！呼びたい！お兄ちゃん！大好きだよー！！だけど…こんな愛は世間では許されない！禁断の愛！だから私は、お兄ちゃんを…殺す！（包丁を取り出す）そしてその後私も死ぬ！お兄ちゃん！来世で恋人になろうね！」

明転。

妹がすごいニヤニヤしている。

爺「どうしたんじやまゆちゃん？ニヤニヤして」

妹「え？何でもないの。ちよつと来世、輪廻転生のことを考えてたの」

爺「そうかそうか。輪廻転生のことをのう。しかし輪廻転生とは、」

爺にスポットライト。

爺「くだらない。じつにくだらない。輪廻転生など愚行。体が朽ち果てるのであれば朽ち果てないようにするべし。そう、このワシの体のように…！サイボーグになるべきなのじゃ…！この機械の体もだいたいぶ馴染んできた…。後はこの体がどれくらい力を出せるのか試すだけじゃ！順平！お前の若く張りのある肉体を消し飛ばすことによつてな！（キャノン砲を構える）よつてお前を…殺す！」

4人、兄をじつと見つめている。それを不安そうに見つめる犬。

犬「クウ…ワンワン！（兄に）」

兄「なんだフミヤ？どうしたんだよ？」

犬にスポットライト。

犬「ワンワン！ワンワン！ワンワンワン！ワンワンワンワン！ワンワンワン！（拳銃を取り出す）ワワンワン」

兄以外、全員にスポットライト。

母「今日！」

父「ここで！」

妹「お兄ちゃんの！」

爺「命を！」

犬「ワン！」

明転。

母「さあさ、ご飯できたわよー。(兄の皿に霧吹きで毒を入れる) はい。(兄の前に置く)」
兄「やっとかよ。(下を向いてご飯を食べようとする)」

兄以外の5人、各々の武器で後ろから兄を狙う。

兄「…おい！(正面を向く)」

兄以外の5人、各々の武器を使ってその場をごまかす。

兄「この飯…ニンジン入ってんじゃないか！食えるか！…もうなんかテキトーに食うわ」

兄、背中を向けて、食べ物を探す。兄以外の5人、各々の武器で兄の背後を狙う。

兄「菓子パンで良いか。(正面を向く)」

兄以外の5人、各々の武器を使ってその場をごまかす。

兄「…何、やってんの皆…？なんでまゆ、包丁で爪研いでんだよ？」

妹「はあ？研ぐだろーが！包丁で爪くらい！」

兄「そう、なのか？(不信そうな顔)…うん(険しい顔になる)」

兄にスポットライト。

母「何？」

父「あの顔まさか！」

妹「私が狙ってることに！」

爺「気が付いたのか？」

犬「ワンワン！」

間

明転。

『ぶっ』とう効果音。兄にスポットライト。

5人「おならかーい！」

母「なんて紛らわしいの！」

父「コケにしておって…！」

犬「ワンワン！（鼻をつまんで苦い顔をする）」

妹「お兄ちゃんのおなら…嗅いでおこう！（兄にだんだん近づく）」

明転。

兄「え？なんだよ？」

妹「気持ち悪いんだよ！」

兄「ええー…！」

兄にスポットライト。

母「いけないいけない、」

父「もつと注意深く、」

妹「動きを観察しながら、」

爺「狙うとするかのう…！」

犬「ウウ〜！」

ゆつくりと兄の背後へ移動する5人。

母「ふふふ…パンを食べながらのん気にスマホをいじっているなんて、」

父「隙だらけだな順平よ」

妹「家族のいるリビングで、」

爺「堂々とエツチなサイトを見ておるわい」

犬「ワウーン…！（目を隠す動作）」

父「今の娘の下着、いいな…」

爺「そうじゃな…」

父「お義父さん…？」

母「お父さん？」

父「母さん…違うぞ今のは…！下着自体が良いとかじゃなくて下着を付けてるあの娘が
エロくて良いという意味で、」

母「それはそれでよ…？」

父「ごめんなさい…」

明転。

兄「え？何々？びっくりしたー！後ろで何やってるの？」

妹「キモイんだよー！（スマホを投げる）」

兄「ええー…。お前さっきからいい加減に、」

妹、兄をビンタし、そのまま包丁を振り下ろすが外す。

兄「ええー！」

妹「…気のせいだよ」

兄「何が？」

爺のキャノン砲発動。少し間をおいて『ポカーン！』という音。全員、上手奥を見る。

爺「気のせいじゃよ」

兄「何が？」

兄にスポットライト。

母「さつきからまゆのあの様子…？まさか、」

父「お義父さんのキャノン砲が再び光り始めている…！まさか、」

妹「お母さんから殺気を感じる…。まさか、」

爺「殺気がただ漏れじゃよ、良平君…！まさか、」

母「あの子もクソニートの命を、」・妹「お母さんもお兄ちゃんの命を、」

父「お義父さんも順平の命を、」・爺「良平君も順平の命を、」

母・妹「狙っているの？」・父・爺「狙っているのか？」

明転。

見つめ合う家族二組を少しビビりながら見る兄、犬にすり寄る。犬、兄を抱きしめつつ見えないように拳銃を兄の後ろに突きつける。

兄にスポットライト。

母「最近のまゆちゃん、あのクソニートのこと異常に嫌っているものね」

妹「お母さんにお兄ちゃんをやらせる訳にはいかない…！」
母「いいわ、それだったら譲ってあげる」
妹「それだったらまずはお母さんを殺る…！」

明転。

母「どうぞ」

妹「それじゃあ遠慮なく」

妹、母を刺す。

兄・母「ええー」

兄にスポットライト。

父「お義父さんがやってくれるなら好都合！」

爺「えねるぎーちゃーじ完了」

明転。

父「お願いします」

爺、キャノン砲をぶっばなす。少し間をおいて父が吹っ飛ぶ。

兄・父「ええー」

爺「照準がズレた」

犬、拳銃で妹と爺を撃つ。

兄「ええー」

爺立ち上がる。

爺「サイボーグじゃから」

兄「ええー」

爺キヤノン砲を溜める。そのままキヤノン砲で犬を殴る。犬、倒れる。

兄「ええー！」

音声『バッテリーが切れました』

爺、倒れる。

兄「ええー！」

間

兄「そ、そうだ…ご飯、飯…食べなきゃ」

兄、ご飯を食べる。しかし毒にやられる。

兄「ええー！」

兄、倒れる。

徐々に暗転。

間

明転。

舞台には妹、父、母、爺、犬。5人、何かしら機械的な物を身に着けている（暗転
中に取り出して付ける）。父、新聞を読んでいる。

父「ええ？今、中高年の間でラップが流行っているんだってさ母さん」

母「あらそうなの？」

父「オヤジラップだって」

兄が下手から入ってくる。兄、キヤノン砲を付けている。

兄「飯はー？」

母「ごめんね、あと少しだから」

兄「んだよー今日もおせーな」

父「順平！またお前はそんな口のきき方を！（兄に武器を持って襲い掛かる）」

兄「うるせーんだよ変態オヤジ！（キャノン砲で応戦する）」

母「二人とも騒ぐのはやめなさい！（武器を持って二人の戦いに加わる）」

妹「お兄ちゃーん！（兄を刺す）」

兄「いってえ！機械の体じゃなかったら死んでたぞ！」

犬「ワンワン！」

爺「うんうん。皆サイボーグならいくら争っても平気じゃ。やはり機械の体が一番じゃ。

一件落着、一件落着」

徐々に暗転。

（終）

「上手にBH」

【登場人物】

山上／クレソン

仲田／バジル

林／タンジ―

荒井／イタリアンパセリ／探偵（山田真二）

国部／ジャスミン

オヤジラッパ―

サイボーグ爺

視えない幽霊

舞台の上下手の側面と後ろに取っ手のようなものが付いている。明転。

舞台には山上、仲田、国部、荒井、林の5人。林だけそわそわしている。

山上「えーあと30分で舞台『5人の悲劇』、いよいよ開演だ。今回キミ達劇団クロサワに演出と役者で参加させてもらった訳だが、最後にいつもの話をさせてもらう。キミ達は普段、喜劇を多く行っているようだが、言ってしまうと笑いはなんて低俗だ。悲劇こそが最も素晴らしい。まあキミ達も一度舞台で悲劇をやれば分かるだろう。笑いなんて自分達が如何にくだらないことをやっていたのかということだね。今回の劇は、登場人物が全員悲しい結末を迎えてしまう、悲劇中の悲劇となっている。皆笑いなど一切忘れて、観客の心にガツンと響く悲しみを、与えてやってくれ」

仲田・国部・荒井「ういっす」

林が手を挙げる。

林「あのーすみません」

山上「どうした？なにかあるのか？残念だが今更結末を変えるなんてことはできないぞ？」

林「そういうことではなくて」

山上「そういうことじゃないのか。なんだ？」

林「あのー上手の後ろにですね、」

山上「上手後ろ？ああ、あの辺？（舞台の上手後方に近づく）」

林「近づかないでください！危ないので」

山上「え？何々？」

山上以外の他のメンバーも察し、そわそわする。

林「あのですね、舞台の上手後ろに…ブラックホールを創っちゃいました」

間

山上「どういうこと？」

国部「あーやっぱりねー…」

荒井「そうだと思っただよ…」

仲田「仕方ない…今回も吸い込まれないように十分気を付けて演技をしましょう…」

国部、荒井、林「ういっす！」

山上「ういっす、じゃなくて。ちょっと意味が全然分からないんだけど？」

仲田「こいつ時々創っちゃうんですよ舞台上」

山上「ブラックホールを？」

林「すみません、悪気はないんですけど」

国部「ご存じないですか？ブラックホール」

山上「いやブラックホールは知ってるけど。あの何でも吸い込んじゃうやつでしょ？」

ブラックホールの効果音(以下B H S E)弱。メンバーが上手後方に引き寄せられる。

山上「何々？何々？」

B H S E弱、止まる。

林「これです」

山上「これです？」

林「急に出現して、急に消えるんです。あと、今は『弱』ですけど、もっと吸引力が激しくなる『強』も出現します」

山上「なんか掃除機みたいだな…。え？っていうかどうするの？公演本番中にブラック

ホールが出たら」

仲田「まあ…いつもはアドリブでなんとかしますね」

荒井「大丈夫ですよ、山上さんなら」

山上「えー？…方が一吸い込まれちゃったらどうなんのよ？」

4人「……」

山上「黙るなよ。おい、黙ってんじやないよ！」

仲田「うーん…まあ大丈夫つすよ。吸い込まれちゃう人なんて滅多にいませんから」

山上「滅多にってことは過去にいたんじゃん！犠牲になった人が！」

荒井「吸い込まれそうになったら舞台の取っ手に掴まるんです」

山上「ああ、だからこの取っ手あったの…気づいたら付いてたからさあ、」

国部「もう開場でーす」

3人「はーい」

徐々に暗転していく。

山上「いや『はい』じゃなくて！ホントにこのままブラックホールに気を付けながら演技しないとイケないの？ねえ、ちょっと、」

完全暗転。一旦全員、はける。

『ブー』という劇場音。

明転。

ナレーションに合わせてタンジー（林）、バジル（仲田）、クレソン（山上）が出てきて動く。

ナレーション（以下ナレ）『遠い昔、ある2つの国の物語。大国である西国と東国は長い間対立していた。しかし5年に一度、両国の貴族から代表者を選出し、命を懸けた決闘を行わせることによって何とか戦争を回避していた。そして今年、決闘の代表者として西国カモミール家・長兄のバジルと東国ベルガモット家・長兄のクレソンが選ばれる』

タンジーとクレソンがはけ、ジャスミンが出てくる。舞台にはバジルとジャスミンの二人。

ジャスミン「ああ、バジル。なぜバジルが西国の代表者に選ばれてしまったの…」

バジル「ああ、ジャスミン。本当は僕だってこんな決闘は嫌なんだ。でも、負ける訳にもいかないんだ。キミの国の誰が相手であろうと、」

ジャスミン「違うのバジル。私達の国、東国の代表者は…私のお兄様、クレソン兄様なの！」

バジル「クレソンだって…幼い頃キミとこの広場で友情を深め合った友の名ではないか！何ということだ…！これは試練、いや天罰なのだろうか…！他国同士の僕達が密かに愛し合っていること…！」

ジャスミン「愛しているわバジル。だけれど…お兄様のことも愛しているの…！」

バジル「どうか嘆かないでくれジャスミン。僕が、この僕が何とかしてみせるから！」

ジャスミン「何を考えているのバジル？」

バジル「そもそも僕はこの決闘制度を良く思っていないかった！だから僕がこの決闘制度を変える！僕は、僕と君の兄クレソンが命を落とさない、それは何か奇跡とも言える方法を考え出してみせる！」

ジャスミン「なんて頼もしいのバジル！だったら、私もお兄様にお願ひしてみるわ！決闘のあと私達が笑って終われる、そんな風にできないか」

バジル「ありがとうジャスミン。僕はまず親友のイタリアンパセリに相談してみること

にするよ。また5日後、この時間に会おう」

ジャスミン「ええ、バジル」

バジル「愛しているよジャスミン」

ジャスミン「私もよバジル」

バジルとジャスミン、抱き合う。バジルは下手から、ジャスミンは上手からはけようとするがBHSE弱。2人、上手後方に吸い込まれそうになる。

ジャスミン「……でもまだ離れたくないわバジル……！」

バジル「僕もだよジャスミン……！」

BHSE弱、止まる。

ジャスミン「……もう大丈夫よバジル」

バジル「僕もだよジャスミン」

再びBHSE弱。2人、上手後方に吸い込まれそうになる。

ジャスミン「……触りましょう？」

バジル「うん……？」

2人、手を握ろうとする。BHSE弱、止まる。

ジャスミン「触れたね？」

バジル「うん……。気を付けてね？」

バジル下手からジャスミン上手からはける。上手からタンジ―が現れる。

タンジ―「そうはさせるか……クソガキども……！」

タンジ―、下手へはけようとするがBHSE強が出現し、立っていられなくなり倒れる。吸い込まれないように取っ手を使い必死に抵抗する。BHSE強止まる。タンジ―、はける。

弱明。

下手からバジルとイタリアンパセリ、上手からジャスミン、クレソンが出てくる。(↓西国のことは下手側、東国のことは上手側で同時進行している。)弱明

中、バジルとジャスミンは互いに必死に2人を説得しているマイム。明転。

イタリアンパセリ（以下イタリ）「キミの熱意には負けたよバジル」

クレソン「お前には降参だジャスミン」

イタリ「分かった、僕も一緒に決闘を中止にする方法を考えようじゃないか」

バジル「分かってくれたかイタリアンパセリ！ありがとう！」

クレソン「いくら相手国だろうが、15年以上会っていなかろうが、バジルは俺の友であつたな。仕方ない、俺もその馬鹿げた考えに乗ってやろう」

ジャスミン「ありがとうございますお兄様！」

イタリ「それで決闘方法は？」

バジル「え？」

イタリ「それが分からないと考える方がないじゃないか。君には知らされているんだろう？」

バジル「…えつとじゃあその書類を取ってくるよ。別に詳細を忘れた訳じゃないからな！」

バジル、下手からはける。

クレソン「それよりお稽古事は良いのか？もう夕方だが？」

ジャスミン「あ！いけない！…ごめんなさい！このお話はまたあとでお願いします！」

ジャスミン、上手からはける。

イタリ「まったくバジルは。やっぱり僕がしっかり支えてあげないとね」

クレソン「まったくジャスミンは。やはりまだまだ俺が支えてやらないとな」

タンジー「その通りでございます」

イタリ・クレソン「誰だ？」

BHSE強。上手からタンジーの足が出て、バタバタしている。イタリアンパセリとクレソンも吸い込まれないように取っ手を使い必死に抵抗する。BHSE強、止まる。タンジー、下手から出てくる。

※タンジーは舞台中央でイタリアンパセリ（西国側）・クレソン（東国側）と同時進行で会話をする。

タンジー「私でございます」

クレソン「タンジー…」

イタリ「なんだタンジー殿でしたか。お久しぶりです」

クレソン「呪術で使う薬草集めはもう良いのか？」

タンジー「はい、珍しい薬草が手に入りましたので」

クレソン「そうか。それで、先ほどお前が言った『その通り』とは、」

イタリ「いったいどういうことですか？」

タンジー「まあその前に…わたくし先日隣の国にも足を運んだのですが、いやいやどうしてやはりこの国とは違い品が欠けてるというかなんというか」

イタリ「何も東国も悪いところばかりという訳ではないですよ」

クレソン「西国にだってしつかりとした文化があるのだ」

タンジー「おや？まさかクレソン様が西国を擁護なされるとは」

クレソン「別に。俺は俺の考えを言った、それだけだ」

タンジー「やはり…あなたは騙されているようだ、隣国の者に」

クレソン「どういうことだ？」

タンジー「クレソン様のためを思つて進言致します。相手国の代表者、カモミール・バジルはジャスミン様を騙し、この国を陥れようとしているのです！」

イタリ「馬鹿な！バジルの恋人であるジャスミンがそのバジルを騙し、我が西国を陥れようとしているですつて…ふざけたことを言っているとタンジー殿でも許しませんよ！」

タンジー「しかしこれは事実でございます。バジル様は歴史ある決闘制度を滅茶苦茶にしようとしている。はたしてそんなことをバジル様ご自身がお考えになると本当にお思いでございますか？」

イタリ「あなたがバジルの何を知っている…バジルを非難するなら本当に許さない、」
タンジー「違います。バジル様は勿論何も悪くございません。悪いのは全てバジル様を唆すベルガモット・ジャスミンでございます！」

クレソン「違う！バジルはジャスミンを騙すような男ではない！」

タンジー「クレソン様がお会いにならないうちにバジルは自分の国しか考えない男になつてしまった。利用するものはなんでも利用する悪魔のような男に。ああ、可哀想なジャスミン様。利用されているとも知らずに彼女はあの悪魔を1人愛し続けておいでなのです！」

クレソン「違う…そんな訳ないだろ…」

タンジー「クレソン様はただ決闘でにつっきバジルを殺せば良いのです。あなたがジャスミン様をお助けするのです」

クレソン「俺が…ジャスミンを救う…」

タンジー「あなたに私の呪術、闇の力を授けましょう。さあ私の手を取るのです…！さあ！」

クレソン 「俺が…バジルを、」

クレソン、ゆっくりタンジ―に近づこうとするところにBHSE弱。

クレソン 「…殺す！（BHのせいでタンジ―から遠ざかる）」

タンジ― 「ではなぜ遠ざかる！」

クレソン 「…心ではまだちょっと拒絶してるのかな？」

BHSE弱、止まる。クレソン、タンジ―の手を掴む。ジャスマミンが上手から出てくる。

ジャスマミン 「お兄様！」

クレソン 「…ジャスマミン！俺はやはりバジルを決闘で殺さなければ！」

ジャスマミン 「何を言ってるのお兄様？」

クレソン 「お前はバジルに騙されているんだ！」

タンジ― 「それでは私はこれで、」

ジャスマミン 「待つてタンジ―。あなた一体お兄様に何を吹き込んだの？」

タンジ― 「私はただ真実を述べただけでございます」

ジャスマミン 「真実？」

タンジ― 「はい、西国のカモミール・バジルがジャスマミン様を恋人と偽り、自国のために利用しようとしているという事実でございます」

ジャスマミン 「バジルが…そんな…なんて言うと思ったの？このペテン師が！」

クレソン 「ジャスマミン？」

ジャスマミン 「私の心はそんな戯言に付け入れられるほど弱くはないわ！立ち去りさない！お兄様、バジルがそんなことを考える訳がないではございませんか！心をしつかりなさってくださいませ！」

クレソン 「はっ！何か、黒いものが…心に…」

タンジ― 「それが本当のお気持ちですよ、クレソン様。」

ジャスマミン 「立ち去れ！…立ち去れー！」

タンジ―上手からはけようとしたところでBHSE弱。

間

ジャスマミン 「…立ち去れー！」

クレソン・タンジ― 「ええー…？」

ジャスミン「立ち去れー！早く立ち去れー！」

タンジー「…いるよー。もうちょっといるよー」

ジャスミン「立ち去れー！・タンジー「いるよー」

クレソン「なんだお前ら…！」

B H S E 弱、止まる。

タンジー「帰るよばーか！」

タンジー、上手からはける。その後、ジャスミンとクレソンも上手からはける。その後、再び下手から剣を持ったタンジーが出てくる。

タンジー「イタリアンパセリ様、決心はつきましたでしょうか？」

イタリ「僕がジャスミンを…あの女を…殺す！（タンジーの持つ剣を取る）」

タンジー「そうですそうです、あなたがバジル様をお救いなさるのです。（下手はけ口を見る）…：…それでは私はこれで」

タンジー、下手からはける。

イタリ「バジル…僕が必ず…キミを救ってあげるからね」

徐々に弱明。

間

明転。

上手からジャスミンが出てくる。

ジャスミン「遅いなバジル。あれから5日。約束の日を忘れる訳はないと思うけど…」

イタリ「バジルは来ないよ」

ジャスミン「あなたはバジルの友人の…イタリアンパセリ様でしたよね？バジルが来ないって、彼に何かあったのですか？」

イタリ「はっはっはっは。良い演技だね。だけど僕は騙されないよ」

ジャスミン「お話が見えないのですが…？バジルは？」

イタリ「僕は知っているんだよ、お前が僕のバジルをたぶらかし、果ては西国を陥れようとしていることをね」

ジャスマミン「な、何を言っているのか…？バジル！いないのバジル！」

イタリ「バジルは今、僕の家だ。タンジールの薬でぐっすりさ」

ジャスマミン「タンジールですって？あなたあの男に何か言われましたの？」

イタリ「だったら何だ？」

ジャスマミン「あの男の言葉に耳を傾けては駄目よ！」

イタリ「僕を惑わそうとしたってそうはいかないぞ！（剣を抜く）」

ジャスマミン「それで私を殺す気…？」

イタリ「そうだ。醜く逃げまどうが良い。自らの行いを悔いながらな！」

しかしジャスマミン、動かない。

イタリ「…なぜ逃げない？」

ジャスマミン「逃げる必要がないからよ。私は何もやましい行いをしていないもの」

イタリ「何だと…？」

タンジール（声）『殺せ…！』

ジャスマミン「無実の人間をあなたは殺すの？」

イタリ「うるさい…！」

タンジール（声）『殺せ…！殺せ…！』

ジャスマミン「そんなことをして本当にバジルが喜ぶと思うの？」

イタリ「うおおおおおおお！！！！！！」

暗転。

BHSE強の効果音。ジャスマミンとイタリアンパセリの悲鳴。BHSE強、止まる。

明転。

ジャスマミンの姿が無い。イタリアンパセリがBHに吸い込まれる寸前で止まっている。イタリアンパセリ、おもむろにジャスマミンを探す。

イタリ「ジャスマミン、さーん…？（上手はけ口付近にいる）」

クレソン「ジャスマミン！いてっ…！」

クレソンが上手から勢いよく出てくるがイタリアンパセリに当たる。

クレソン「ジャスマミン？ジャスマミン…？（ジャスマミンを探す）」

間

クレソン 「(小声で) 吸い込まれた?…吸い込まれた?」

イタリ 「(微妙な反応をする)」

クレソン 「…:貴様が、ジャスマミンを…殺したんだな!そして…消したのか?」

イタリ 「…そうだ!僕が…殺した!そして…食べて、食べてやった全部、」

クレソン 首を横に激しく振る。

イタリ 「…ということは無い。僕は人間は食べない」

クレソン 「そうだろうな…!」

イタリ 「あの男から、もらった、闇の力で…跡形も無く、消し去ってやったわ!」

クレソン 「…:ジャスマミン!!」

イタリ 「僕はバジルをたぶらかした悪魔に裁きを与えただけだ!」

クレソン 「悪魔だと…?なるほどあの男が言っていたことは正しかったようだ…!西国の連中は皆、非人道的だ!狂っている!」

クレソンとイタリアンパセリの殺陣。タンジー、下手から出てきて成り行きを見ている。クレソンの剣がイタリアンパセリを貫く。

イタリ 「バジル…バジル…!」

イタリアンパセリ、クレソンの足を掴む。

クレソン 「薄汚い西国の人間めが…!この俺に触るな!足を掴むな!」

クレソン、イタリアンパセリを蹴飛ばす。そのタイミングでB H S E強。吸い込まれるようになるイタリアンパセリ。

暗転。

ナレ 『これより中休憩となります。二幕の開演までもうしばらくお待ちください』

明転。

舞台には山上と仲田、林の三人。

林 「…どうしましょうね?」

山上 「俺の台詞だよ!まさか二人もブラックホールに吸い込まれるとはね!この後

どうするんだよ……」

仲田「一応物語上、あの二人は死んでしまっているのよ、」

山上「いやいやバジルの葛藤とか、クレソンの回想とかであの二人を出そうっていう演出だっただろう！物語が大分うっすくなるわ。……こうなったのもな、全部お前（林）のせいだぞ！分かってんのか³⁵！」

林「分かっていますよ！俺だって……どうにかしたいんです！（悔しさをアピールする）」

山上「……言い過ぎたよ」

林「いえ……。もうこうなったら……ホワイトホールを創るか……。そっちの方が、良いですよね？」

山上「え？ホワイトホールって何？」

林「あれです、ブラックホールで吸い込まれた人が出てくる穴のことです」

山上「……いやいや、そんなのあるんだったら最初から創ってくれよ！」

林「ちよっとしんどいんですけど……頑張ります！」

山上「おお、頑張ってくれ。それじゃあ二幕が始まって、バジルとクレソンの決闘が始まったら……そうだな、下手はけ口の裏にその、ホワイトホールを創ってくれ。裏だからな。突然2人が舞台に出ないように」

林「おっけいです」

仲田「あの、いつまでにホワイトホール作った方が良いですかね？」

山上「ああタイミングってこと？そうだな……決闘はバジルがクレソンに勝って剣を刺すだろ？その後、俺がジャスミンから預かっていた手紙をバジルに渡して、その時回想シーンになってジャスミンが出るから……それまでだな」

林「分かりました」

山上「その後の確認は大丈夫だな？」

林「一応お願いします」

山上「なんでだよ！散々練習してきただろ！だから、その手紙に今回の黒幕がタンジ……だって書いてあるから、ばれたタンジは、自分は両国を恨んでいて復讐者であることを語り出す。それで残ったバジルに武器を向ける、も、それをバジルが返り討ちにする。しかしラスト、親しい者は周りにはもう誰もいない、悲しみに暮れたバジルも自殺してしまう。悲劇！すごい悲劇！」

林「なるほどねー」

山上「さっきからなんだお前？」

仲田「あの一」

山上「何？」

仲田「あんまりカチカチに流れを決めない方が良いと思うんすよね」

山上「はあ？」

仲田「いえいえ。ブラックホールも残っていますし、多分まだ予測不能なことも起こると思うので、その都度その状況に一番合った行動をとるのが良いかなーと」

山上「ああ、それは勿論だよ。さっきもそうしてたろ？」

仲田「ですよ。じゃあ最後までしちよつと結末が悲劇からブレるようになってても最悪、」

山上「それは駄目だよ。絶対悲劇」

仲田「いやまあ最悪ですよ、」

山上「駄目だつて」

仲田「…最悪、」

山上「駄目だあ」

仲田「悲劇、」

山上「絶対駄目」

仲田「あ、今悲劇駄目って言った」

山上「なんだお前？謀反か？とにかく！絶対結末は悲劇だからな！」

暗転。

ナレ『まもなく、二幕の開演となります』

明転。

舞台にはバジルとタンジ―。

バジル「そ、そんな…。ジャスミンとイタリアンパセリが…」

タンジ―「全て事実でございます。あのクレソンがイタリアンパセリ様を剣で貫いたところ、私しかとこの目で見ておりました」

バジル「クレソン…！」

タンジ―「ジャスミン様をやったのもおそらくクレソンではないかと。何としても決闘でバジル様を仕留めたいクレソンは、妹様のお願いに激怒したのだと」

バジル「クレソン…！！」

タンジ―「明日は決闘の日。どうかあまり考え込まぬよう…」

タンジ―、下手からはけながら徐々に弱明。上手からクレソンが現れる。
明転。

ナレ『これより東西国代表者による決闘を開始する。両者、前へ！』

バジル「クレソン、こうやって話すのは15年ぶりだね…！」

クレソン 「そうだな…！よもやこのような深い憎しみを向けるとは思わなかったがな…！」

ナレ 『始め！』

バジルとクレソン、剣を交えながら喋る。タンジ―が下手から現れ、決闘の様子を見ながら下手はけ口にホワイトホールを創り始める。

バジル「それは僕の台詞だ！そんなにも西国、僕が憎いなら！このバジルだけをやればよかっただろう！どうして…ジャスミンとイタリアンパセリを…！」

クレソン 「何を言っているのだお前は…！全て貴様が差し向けたことだろうが！俺の怒りはもう留まるところを、」

B H S E 弱。 3 人、吸い込まれそうになる。 B H S E 弱、止まる。

クレソン 「…知らぬぞバジル！」

バジル 「だからそれは僕の台詞だと言っているだろおー！」

上手に近づき過ぎたバジルとクレソン、下手へゆっくり移動する。バジルとクレソンの最後の一撃。

B H S E 弱。 3 人、吸い込まれそうになる。 B H S E 弱、止まる。

クレソン 「ぐわあ！（倒れる）」

タンジ―「できたー！ホワイトホール、（タンジ―の方を見るバジルとクレソン）…という名の復讐のシナリオが完成するぞー。もうすぐー。（天に仰ぐ）」

バジルへ頷くクレソン。

バジル 「さらばだクレソン…」

ホワイトホールの効果音（以下 W H S E）。バジルとクレソン、タンジ―を見る。タンジ―、下手裏を指差す。 W H S E、止まる。
バジル、クレソンにトドメを刺そうとするが下手からオヤジラッパ―（以下ラッパ―）が出てくる。

間

ラッパ―「：よう、俺登場／なんだこの状況／俺の心境戦々恐々」

クレソン「：誰々？誰々？いや誰だよ！どういうこと？」

タンジ―「違うところで吸い込まれた：誰か？」

クレソン「そういうの全部繋がってるの？としかかなんてこっち出てくんだよ…！」

W H S E。下手からサイボーグ爺（以下爺）が出てくる。

爺「ペットのフミヤを撃つたと思ったら…ここはどこじゃ？」

W H S E。下手から視えない幽霊（以下幽霊）が出てくる。

幽霊「え？ようやく成仏できたのかな？」

W H S E。下手から探偵と探偵に押されながらジャスマミンが出てくる。

クレソン「どういう状況、これ…！」

バジル「でも国部、じゃなかったジャスマミン！そしてイタリアンパセリ！戻って、というか生きていたのかい…！」

ジャスマミン「え、ええ？状況が全然分らないんだけど」

探偵「イタリアンパセリ？私はしががない探偵の山田真一ですが？」

バジル「あ、全然違う人でしたか…！」

クレソン「な、何なんだこの…3人は…！」

幽霊「あ、やっぱり俺のこと視えてない？」

クレソン「誰か説明しろ…！…タンジ―！」

タンジ―「え…こいつらは、あれだ…闇のしもべだ…？」

バジル・クレソン「闇のしもべ…？」

タンジ―「そうだ…私が呼び出した…：私は、復讐者だ！そう復讐者だ！もうこのタイミングで言っちゃうぞー！お前達両国を恨んでいる！そう、色々恨んでいたのだ！だからこの闇のしもべを地獄の底から呼び出したのだ！あとこのジャスマミンも私の闇の奴隷として生き返らせたのだ！そして今からお前達を…殺す！」

間

バジル「お前が黒幕だったのかタンジ―！…クレソン！こうなったら二人でこいつら

を倒そう！今はこの流れが正しい！」

クレソン「もう…わかったよ！」

バジルとクレソン、剣を構える。

探偵「いやいや待って待って。なんで戦うことになっているのですか？」

爺「戦っても良いが…ぶっぱなすぞ？」

ラッパ―「戦いなんて無駄じゃない？／こんなことしてもきりがない」

幽霊「そもそもここは、」

探偵「そもそもここは一体どこなのですか？あなた達は何なのですか？」

タンジ―「この場所は…なんというか、舞台？」

探偵「舞台？」

クレソン「決闘場という名の舞台ということだ。…あなた達はこいつが呼び出したみたいだな。復讐のために。…とりあえずあなた達は剣で斬られたらあっち（上手）の方へ行ってもらえると、」

探偵「復讐とは一体どういうことでしょうか？」

他の人物も『うんうん』と頷いている。

タンジ―「え？あの…なんと言いますか、」

探偵「基本駄目よ、復讐って。まあ何か事情があるとは思うので、一旦お兄さん達に話してごらん下さい」

タンジ―「…いや、昔私の一族がですね、西国と東国の人達に蔑ろにされていて、まあその一族の恨みを晴らそうかなーっと」

探偵「あーそのパターン。復讐者によくあるやつですね」

爺「昔は差別の酷い所は多かったからのう。しかし、復讐などしても誰も得はせん」
タンジ―「いや、でも、」

爺「今まで辛かったかもしれぬが、復讐を成し遂げたところでお前さんは虚しくなるだけじゃ。悪いことは言わん。違うことに生きがいを見い出すのじゃよ」
ラッパ―「復讐なんてもうやめる／俺ちよこつと好き今井メロ」

幽霊「俺もやめた方が良いと思うぞー。どうせ聞こえてねえんだらうけど！」

クレソン、タンジ―の付けているペンダントを指差す。

タンジ―「…これ、一族の物なんですよ。色々怨念とか詰まってるんで、このペンダントがある限り、僕達復讐をやめられないですよ、はい」

幽霊、そのペンダントを持って裏に捨てる。他の人達は戸惑いながら宙に浮くペンダントを目で追う。

間

タンジー「わかったやめる！俺、復讐やめる！」

クレソン「タンジー！」

タンジー「だって仕方ないじゃん。そういう流れじゃん今！。…皆さんどうもありがとうございませう。あの、お帰りはあちら（上手後方）になりますので。そのまま裏にいれば帰れると思いますので」

爺「強く生きるのじゃ」

爺、上手へはける。

ラッパ「P・E・A・C・E、ピース」

ラッパ、上手へはける。

幽霊「結局ここでも駄目だったよ…」

探偵「なに、あなたもよくやっていますよ」

幽霊「…え、俺のこと視えんの？」

探偵「はい？」

幽霊「やつと俺のことが視える人と出会えたぜ！」

探偵「ま、まさか…幽霊…ひ、ひえ〜！」

幽霊「おい待ってくれー！」

探偵と幽霊、上手へはける。

BHSE弱。4人、吸い込まれそうになる。BHSE弱、止まる。

間（4人、色々アイコンタクト等をする）

バジル「こうして僕達は皆仲良く手を取り合って、」

クレソン「いやいやいやいや！何言ってるんだ！」

バジル「こうなったら仕方ないだろう？タンジーは改心しちゃった、したんだから。ジヤスミンだって生き返った。悲劇ではない、ハッピーエンドに進もうじゃない

か！」

ジャスミン「ちよつとずつ流れが読み込めてきましたが、お兄様、私もそう思います。今回はこのまま…ハッピーエンドですよ」

クレソン「…分かった」

バジル「クレソン！」

クレソン、バジルを剣で斬ろうとする。バジル、それを避ける。

バジル「クレソン！」

クレソン「そうだな、ハッピーエンドに進もうじゃないか。ハッピーエンドとは全員が幸せになること。イタリアンパセリ、あいつだけ死んだままだ。このままだとあいつだけ悲劇になってしまう。だから、イタリアンパセリが寂しくならないう、バジル、親友のお前もあの世へ送ってやろう！（バジルに襲い掛かる）」

バジル「馬鹿か！今更そんなことしたって、それこそ滅茶苦茶でしょうが！」

クレソン「うるさい！」

バジル「じゃああれか？イタリアンパセリが生き返ったらハッピーエンドでも良いんだな！」

クレソン「もう一度こいつ（タンジ）が生き返らせるってか…：じゃあ良いだろう。3分待ってやる。それまでに出してみる！まあそんな都合良く出てくる訳も無いだろうがな！」

→台詞途中からW H S E。全員、下手はけ口を見る。

間

クレソン、走って下手はけ口の裏を確認し、ゆっくり顔を正面に戻す。

クレソン「やはり今すぐお前らをあの世へ送ってやろう！（剣を振りかぶってバジルに襲い掛かる）」

バジル「裏にいたんだ！あいつ裏にいるぞ！表へ出そう！」

クレソン「裏には誰もいなかった！」

ジャスミンとタンジ、上手から裏へ行こうとするがクレソンがそれを阻む。イタリアンパセリ、下手はけ口から顔を出す、クレソンがそれを走って隠す。

バジル「やっぱりいたぞ！」

クレソン「何の話？」

クレソンと他3人の攻防が繰り広げられ、結局イタリアンパセリ、舞台に出てくる。

クレソン「ちくしょう！」

バジル「イタリアンパセリじゃないか！どうしてここへ？」

イタリアンパセリとタンジー、見つめ合い頷く。

イタリ「僕は最初から死んでなど、いなかったんだ」・タンジー「…彼は私が生き返らせた、ということでもなく、」

バジル「どっち？」

イタリ「あの時、死んでいなかったんだ」

クレソン以外、盛り上がる。

バジル「よし！これで全員揃った！なあクレソン？…このままハッピーエンドへ進もう！（オペ卓側へ）エンディングだ！音楽を！」

しかし（元々のエンディングである）暗いBGMと共にバッドエンドのナレーションが流れてしまう。

ナレ『バジルとクレソンという才能ある貴族の若者を失った両国は…』

バジル「それ元々のやつ！」

『違う違う』とオペ卓側へジェスチャーをする4人。クレソンだけオペ卓側へOKのジェスチャー。

ナレ『活気を失い緩やかに衰退していってしまう…』

タンジー「…というのが私の計画だったけど！」

ジャスミン「えー今回の事件で両国は今一度決闘制度を見直し！」

徐々に暗転していく。

イタリ「バジルとジャスミンは結ばれ！」

バジル「えっと…両国はもっと平和な関係を築くのでした！」

クレソン「しかしその平和も長くは続かなかった！」

4人「おい！…続いた！」

クレソン「続かなかった！」

4人「けどまたすぐ平和になった！」

クレソン「それは嘘！」

4人「嘘じゃない！」

クレソン「こいつらはすぐに嘘をつく！」

完全暗転。

間

B H S E 強。

5人「わーーーーー！！まだ残ってたのかーーーー！！」

(終)